



山本薫久さんの指導のもと、緊張した面持ちでイネを刈り始めた「おじさんの田んぼ」のメンバー

中山間の田んぼを活かし、みんなで米を自給

なんと楽しきかな

# グループ帰農

愛知県豊田市・萩野地区

愛知県豊田市北部。両側を山に挟まれた、形もいびつな小さい田んぼ。10月最初の土曜日、子供を含む20人近い町場の人たちが集まった。

文・写真(一部) 編集部

おじさんとチルドレン、にぎやかイネ刈り

「おじさんの田んぼ」のイネ刈りは、プロワターのエンジン音をうならせての朝露払いから始まった。田んぼは7枚で20aほど。面積の割に枚数が多い。しかも刈るのは、コンバインに乗るのは初めてというおじさんたちだ。濡れたイネ



バインダーでイネを刈る松井博行さん。  
だいぶ余裕が出てきた



ブロワーで朝露を飛ばす吉田道孝さん



を刈るとモミの選別が悪くなるので、ふつうは乾くのを待ってイネ刈りを始めるが、露払いは少しでも早く作業を始めようという小さい田んぼならではの工夫だった。

豊田市桑田和町萩野地区くわだわ はぎのの山間で、通称「おじさんの田んぼ」の米づくりが始まったのは2019年春のこと。「おじさん」は、地元の人ヨタ生協に勤める同年代の職場仲間5人。2人が2枚の田んぼで始めたのが翌年は5人になり、田んぼが増えたのに合わせるように「野中チルドレン」と呼ばれる女性9人も加わって一気にぎやかになった。

チルドレンとはいっても、9人は市内の野中慎吾さんという自然栽培農家のところで数年間米づくりを体験した主婦のみなさん。田んぼの四隅のイネをザクツザクツと鎌で刈るのは手慣れた様子で、出で立ちもおじさんよりサマになっている。

おじさんの田んぼのリーダーは松井博行さん(58歳)。生まれは萩野地区の近くだが、次男坊で今は市内平野部に住んでいる。松井さんが昨年ここで米づくりを始めることになったのは、田んぼの「借主」である山本薫久さん(66歳)と知り合ったのがきっかけだった。山本さんは20年ほど前、Iターンで萩野にやって来て以来、借地の田んぼを耕作してきた。いわば非農家が